

こ が のぶあき
古賀 伸明

連合・事務局長

昨年(2007年)の世相は？ そして今年は？

明けましておめでとうございます。

ご家族お揃いで健やかな新春をお迎えることとお慶び申し上げます。

昨年12月、恒例となった日本漢字能力検定協会の今年の世相を表す「今年の漢字」が「偽」と発表された。清水寺の奥の院でこの漢字を揮毫した森清範貫主が、「こういう漢字が選ばれることは恥ずかしい。驚きどころか悲憤に堪えない。己の利ばかりを望むのではなく、分を知り、自分の心を律する気持ちを取り戻してほしい」と述べたと伝えられた。食品をはじめ政界やスポーツ界など、身近な様々な分野で偽装が続いたことが反映されたのであろう。ちなみに、二位は「食」、三位は「嘘」、「疑」、「謝」、「変」などが続いた。募集にはハガキやインターネットを通じて9万816通が寄せられ、約18%の1万6550通が「偽」であり、「何を信じたらよいか、わからなくなった。来年こそは看板に偽りなしを」との多くの声がよせられたという。

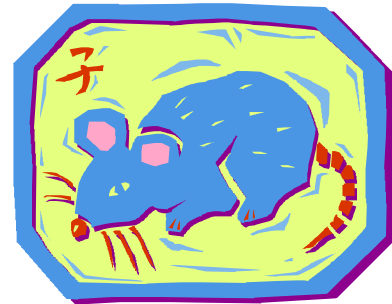
この「今年の漢字」は1995年から、「世相を現す漢字一字」を公募し、京都の清水寺で発表されているが、このように世相を現すものとしては、過去から様々なものがある。

たとえば、一番良く知られているものは、1984年からの「流行語大賞」、昨年の大賞は「(宮崎を)どげんかせんといかん」「八ニカミ王子」。「どげんかせんといかん」は、よく

ご存知の東国原・宮崎県知事の言葉、「八ニカミ王子」は、男子プロゴルフツアーに15歳8ヶ月の最年少記録で優勝した高校1年の石川遼選手の愛称である。名付け親は優勝したマシニングウェアオープンKSBカップで実況を務めた地元放送局のアナウンサー。また、トッペンには「(消えた)年金」「そんなの関係ねえ」「どんだけえ～」「鈍感力」「食品偽装」「ネットカフェ難民」「大食い」「猛暑日」が並んだ。

某生命保険会社の「サラリーマン川柳」も有名だ。このコンクールは1987年(発表は1988年)から始まり、21回目を迎える。残念ながら昨年募集した優秀作品の発表は今年の2月中旬となるので、一昨年(第20回募集)の作品のトップ3を紹介すると「脳年齢 年金すでに もらえます」「このオレに あたたかいのは 便座だけ」「犬はいい 崖っぷちでも助けられ」である。応募総数は2万3千を超えるという。4位にはこういうものもあった。「アレどこだ?アレをコレする あのアレだ」思わず我がことにおきかえてしまう。同様な川柳が、第6位「忘れぬよう メモした紙をまた探す」。

異なる生命保険会社が12月中旬に発表するのが、1989年から続けられている「創作四字熟語」。1万語を超える作品が寄せられるという。昨年(2007年)の優秀作品10編を見よう。出生率が6年ぶりに上昇したことを



うけた「産声多数（賛成多数）」、落合オレ流野球で中日ドラゴンズ53年ぶり日本シリーズ制覇の「我竜天制（画竜点睛）」、医者不足による急患問題を突いた「医師薄寂（意志薄弱）」、政治とカネの問題、1円からの領収書公開をめぐって政治資金規正法改正検討の「一円固持（一言居士）」、北朝鮮の核疑惑いまだ晴れず「核停深刻（確定申告）」、全国各地で銅やステンレスなどの金属資材ばかりの盗難事件が相次ぎ、果ては公園のすべり台までもが盗まれた「奇怪金盗（機会均等）」、10代・20代の若い世代にハシカが大流行「耐無麻疹（タイムマシン）」、関東では猛暑と柏崎刈羽原子力発電所の停止が重なり、電力供給が切迫した「都市電切（都市伝説）」、所信を表明した直後に急に辞任した首相に対し「突然返位（突然変異）」、そして、小島よしおをはじめ、裸姿の芸人が大人気「半裸万笑（森羅万象）」。

1987年からある大学が始めた「現代学生百人一首」も、同様に現代の世相を反映する一つの指標である。特に現代の児童・生徒・学生が何を考えているかを判断する指標として使われることが多い。この「現代学生百人一首」も、今年の1月中旬に発表される。一昨年は6万首を超える応募の中から、入選作品100首と小学生の部10首が選考された。一首一首が興味深いものであるが、紙面の関係もあり、小学生の部のほっとする一首だけ紹介したい。「秋空にうでをのばしてかきまぜて大

きなわたがし作ってみたいな」、小学校2年生の作品である。

ついつい興味深くて、紙面の都合も考えず、昨年一年間の政治・経済・社会などや自分自身の生活をダブらせながら、世相を現す各種の調査から振り返ってみた。昨年一年間は日本全体が揺れ動いた年と言っても過言ではないだろう。明るいニュースがなかったことが残念であるが、今年の干支は戊子（つちのえね）。「戊」は、万物を育む土が集まった山や丘を象徴する言葉だそうだ。「戊」の字は「茂る」という意味を持ち、草木が大地に繁盛している様子。「子」は十二支の一番目、動物では鼠（ねずみ）になっている。「子」の字は「ふえる」という意味を持ち、種子の中に新しい生命が芽生える様子を表している。

今年も課題山積の年になると思うが、それぞれの立場で、労働運動の明日を築く決意で運動を展開すれば、必ずや新たな労働組合の創生は成し遂げられると確信する。同時に、このような時代だからこそ、個人や組織の新たな可能性を探し出す絶好の機会ともいえる。あらゆる可能性に果敢に挑戦し、難しくとも、お互いに輝きのある年にしたいものだ。

皆様にとって、実り多き一年となりますよう心より祈念申し上げます。